

研究ノート

ラフカディオ・ハーンの「日本——ある解釈の試み」の「付録」について

遠 藤 みどり（臨床心理学科）

キーワード：ハーバート・スペンサー、明治の対外政策、投影的同一視

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn、1850–1904）は周知の通り、民族・文化的な越境者として19世紀後半を生き、ジャーナリストとして今日でいうマイノリティー文化を欧米に紹介する役割を果たした。彼がその生い立ちに基づく境界型パーソナリティー構造の所有者で、種々の精神症状を経験し、それを作品に昇華することで危機を克服したと見られることは既に報告した。

彼の作品のうち「怪談」に代表される再話文学は日本で広く親しまれているが、日本に関する卒業論文と称せられる「日本——ある解釈の試み」は、ハーンの没直後、セツ夫人に版權が渡らず、わが国では原作に接することの可能な一部の研究者にしか読まれていなかった。欧米において日本理解のための必読書とされて来たこの作品は、こうして日本の読者大衆には秘され続ける結果となり、欧米人の日本観と日本人一般の国際的対外意識とのギャップを持続させた一因という趣すら存在する。しかも、没後数十年を経た第2次大戦後に出版された邦訳では、末尾の「付録（Appendix）」が削除されている。その「付録」部分の全文の拙訳を以下に掲げる。

付録

ハーバート・スペンサーの日本への助言

約5年前、当時東京在住だったさるアメ

リカ人教授が私に、ハーバート・スペンサーの没後、この哲学者が日本のある政治家に宛てた、皇国がそれによってその独立を保ちうるかも知れぬ政策に関する、一通の助言の書簡が公開されるであろうと告げた。それ以上の情報は得られなかった。しかし私は、「第一原理」の中（178章）の日本の社会的解体に関する記述を思い浮かべ、その助言は最も保守的な種類のものと判明することがほぼ確実であろうと感じた。

ハーバート・スペンサーは1903年12月8日の朝（本書の準備中）に逝去した。そして周知の状況下で、金子堅太郎男爵宛の書簡が、1904年1月18日付のロンドン・タイムズに公表された。

ウィルトシャー州ピューシー、
フェアフィールドにて

1892年8月26日

親愛なる閣下、——私の2通の書簡（原注、未公開）の翻訳を、新総理に指名された伊藤伯にお送りいただくという貴下の御提案には非常に満足致し、喜んで御同意申し上げます。

貴下が更にお訊ねの複数の御質問に関しましては、まず第一に、一般的に、日本の政策はできるかぎり欧米の政策から一定の距離を保つものであるべきだと愚考するとお答え

させていただきます。より強力な諸人種の存在下、貴国の置かれた位置は慢性的に危険なものであり、貴国は外国人に対し、可能な限り足場を与えぬよう、あらゆる警戒をされるべきであります。

私の思いますには、貴下らが許可されて有利でありうる唯一のやりとりの形は、有用なものの交換——物理的ならびに精神的な産物の輸入と輸出に必須のもののみでありましょう。他人種、特に、より強力な種族の人々には、この目的の達成に絶対に必要とされる以上の利権を許してはなりません。一見したところ、貴下らは欧米列強との条約改正によって、「皇国全体を外国および外国資本に対して開放する」ことを提案しておいでのようにです。私はこれを致命的な策と思ひ遺憾に存じます。何が起りそうであるかを知りたいとお望みでしたら、インドの歴史をお学び下さい。より強力な人種の一つに一たん拠点を獲得させてしまおうものなら、時の経過と共に攻撃的な政策が発展し、日本人との複数の衝突に至ることが不可避となるであります。こうした衝突は日本人による攻撃という表現がなされ、それに復讐すべきだということになるのが、尤もらしい筋書きであります。領土の一部は占拠され、外人居留地として譲渡を要求されるでしょう。そしてこのことから結局は、日本帝国全体の従属が発展するであります。貴下らがこの運命を避けられるには、いずれにしろ非常な困難が存在するとは存じますが、もしも貴下らが外国人に対し、私が御示唆申し上げた以上の利権をお認めになるなら、貴下らはこの成り行きを容易にしておしまひになるであります。

このように一般的に御示唆申し上げた助言の遂行にあたりましては、貴下の最初の御質問にお答えして、外国人が国内に所有地を持つことの禁止だけでなく、借地権を与えることも拒否し、居住の認可は一年契約の借家人としてのみ許すということになさるのがよろしいと存じます。

第二の御質問に対しましては、外国人には官有または官営の資源の運営を断乎禁じられますようにお勧め致します。この場合、それらを運営する欧米人と貴国政府との間の齟齬の源が生じやすいことは明白で、斯様な争い

の源が生まれますと、欧米政府や他の強国に、欧米人の職員が要求するものを何であれ寄越せと主張するように、懇願が参ることになるでしょう。と申しますのは、文明国民の間ではどこでもかしこでも常に、自国の外務官僚や派遣商人が提示するものが信じられる慣わしだからであります。

第三に、私の御示唆申し上げた政策を遂行なさるには、沿岸貿易も貴国自身の手中に収め、外国人がそれに従事することをお禁じになるべきであります。この沿岸貿易は、前に申し上げた、認めて然るべき唯一のもの則ち、有用なものの輸出入促進に必須な条件には、含まれないことが明らかであります。他所から日本にもたらされる有用物資の頒布は、この場合もまた、それに関わる種々の交渉が、争いやその結果生じる攻撃に扉を開くことになろうという理由から、日本人自身に委ねられるのが妥当で、外国人には拒まれるべきであります。

最後に残った、「わが国の学者や政治家の間で現在非常に熱心に論じられており」「最難問の一つ」であると仰せの、外国人と日本人との通婚に関する貴下の御質問には、合理的にお答えするのに全く何の困難もありません。それは断乎禁止すべきであります。これは根源的には社会哲学の問題ではなく、生物学の問題であります。混成変種が、或る僅かな度合以上に分岐する時、それが長期にわたれば結果は不可避免的に悪いものになるという、異人種間の通婚と動物の異種交配から齊しく供給される豊富な証拠が存在します。私自身、この問題に関する証しを過去多年にわたり見慣れており、私の確信は数多くの源からの多数の事実に基づいて居ります。この確信を私はつい半時間前に確かめたばかりであります。というのは、私はたまたま、家畜の交配に関して豊富な経験をお持ちの有名な紳士と共に田舎に滞在中なのですが、その方について先刻お尋ねしたところ、例えば羊の変種について、うんとかけ離れた異変種の交配時、特に第2世代において悪い結果が生じ、混沌体質とも呼ぶべき、諸特徴の無数の混合が生じるといふ私の信念を、完全に確証して下さいました。そして人間でも同じことが起るのであります。インドの欧亜混血児やアメリカの混血

児などがこれを示して居ります。この経験の生理学的根拠は、生物の如何なる変種も、多くの世代のうちには、その特定の形の生に対し、或る体質的適応を獲得し、また他のすべての変種も同様に、それ自身の特定の適応を獲得するということであるように見えます。その結果、うんと違った方向の生活様式にそれぞれ適応した、遙かにかけ離れた二つの変種の体質を交ぜ合わせると、どんな条件にも適しないためにどちらの生活様式にも適しない体質、つまり、適切に働かない体質が生まれることになるのであります。それ故、日本人の外国人との結婚は、絶対に断乎禁止なさい。

私は、御示唆申し上げた理由から、最近アメリカで成立した、中国人の移住を禁じるための規制に、全面的に賛成であり、もし自分にその力があれば、これを可能な限り最少に制限するでありましょう。そのような決定を下す理由は、二つのことのうち一つが起るに違いないからであります。つまり、中国人がアメリカに広汎に定住することを許されるなら、混血せぬままであれば、奴隷でないにしても奴隷に近い地位の従属的な種族を形成するか、または混血すれば、悪い雑種になるに違いないということであります。どちらの場合でも、移住が大規模になれば膨大な社会的危害が生じ、社会混乱が結果するでありましょう。欧米人種と日本人との混血がかなりの規模で生じた場合にも、同じことが起るでありましょう。

それ故私の助言は、全面的に強度に保守的であることがおわかりいただけるでしょう。そして私は、はじめに申し上げたように、可能な限り他種族と一定の距離を保たれるようにと申し上げて、終りにさせていただきます。

私は、この助言を内密で申し上げるのであります。わが同国人の敵意を掻き立てることは望ましくございませんので、私の存命中は、これが公然と外部に洩れませぬよう、お願い致します。

敬具

ハーバート・スペンサー

P.S. この助言が秘密とは申しまして、伊藤伯にお伝えいただくことは、無論お止め致しますせんし、むしろ、伯がこの助言を考慮に入れて頂く機会をお持ちになるように望みます。

ハーバート・スペンサーが彼の同国人の偏見をどれほど明らかに理解していたかは、この書簡へのタイムズのコメント．．．主として、イギリス人の因習的な心が、直接の利益に反する新しいアイディアの苦さに憤る際に通例伴う、理不尽な性質の悪用に特徴づけられたコメントによって示された。しかしこのケースの真の事実に関するいくらかの知識は、日本が当面、一般にいつて文明の大義、また特定的には英国の利益のために戦うことができるとすれば、それは取りも直さず、より賢明な一世代の日本の政治家たちがまさしく、この書簡の中に示された線に沿ったしっかりした保守的な政策．．．不当にも「途方もない自分勝手」のあかしと呼ばれたもの．．．を維持したためであると、タイムズにすら確信させるに役立つであろう。

この助言自体がいつかの時点で、日本政府の政策に影響するのに直接役立ったかどうか、私は知らない。しかしそれが国家の自己保存の本能と完全に一致したことは、治外法権撤廃の唱導者たちが遭遇せざるを得なかった猛烈な反対の歴史と、まさにハーバート・スペンサーの書簡にあった事柄に関して制定された予防的立法の性質によって示されている。治外法権は（おそらく不可避免的に）撤廃され、この国の資源は、外国資本に自由に利用されるままにはならなかった。また、外国人は土地の所有を許されていない。日本人と外国人の間の結婚は禁じられなかった（原注。東京ではそうした結びつきを呈する家族の数は百以上と言われる）が、それは決して奨励されなかったし、また特別の法的制約の下にのみ生じうるのである。もしも外国人が結婚を通じて日本

の不動産を所有する権利を獲得することができていたなら、かなりの量のそうした所有地が、すぐに異国人の手に渡っていたであろう。しかし法律は賢明にも、外国人と結婚する日本女性はその時点で外国人になり、そのような結婚による子供たちはずっと外国人のままになると規定した。他方、日本の家族の養子になった外国人は日本人になり、そのような場合の子供たちはずっと日本人のままである。しかし彼らも、或る不利の下に置かれ続けるのである。彼らは国の上級公務から排除され、また陸海軍の士官にさえ、特別の許可による場合を除いて、なることができない。(原注、この許可は1, 2のケースでは与えられたようである。)最後に、日本がその沿岸貿易を自らの手中に保って来たことは注目すべきである。

そうすると全体として、日本の政策は、かなりの程度までハーバート・スペンサーの助言の書簡が示唆したコースに従ったと言ってよかろう。そして私の愚見によれば、その助言がもっと厳密に従われなかったのはまことに残念なことである。もしもこの哲学者が存命で、最近の日本の勝利、...日本の艦船を一隻も失わずしての強力なロシア艦隊の敗北と、鴨緑江での3万3千のロシア軍団の敗走、...を耳にし得ていたなら、彼はその助言を髪一筋も変えなかったであろうと思う。おそらく彼は、その人道主義者としての良心が許す限り、新しい戦いの科学を日本人が学び尽したことを賞賛したであろうし、示された高い士気と、古来の鍛錬の勝利を讃えたのではなかろうか。...彼の共感は、ロシアの保護地になることを招き寄せる必要か、戦う必要性かの間で、選択を強いられた国の側にあったであろう。しかし、勝った場合の未来の政策について、再び問われていたならば、彼はおそらく質問者に、軍事的効力は産業力とは非常に異なるものであることを想起させ、彼の警告を熱心に繰り返したであら

う。日本社会の構造と歴史を理解している彼は、外国との接触の危険性をはっきり感じ取ることができ、そこからこの国の産業の弱点を有利な方に向ける企てがなされた可能性がある。...次の世代には日本は、危険を冒すことなくその保守主義の多くを棄てることができよう。しかし今のところは、その保守主義が日本の救いなのである。

最後の部分にはおそらく、「或る保守主義者」のモデルになった親友の日本人、雨森信成の見解が、大幅に取り入れられていると思われる。ハーバート・スペンサーと自らを投影的に同一視していたハーンは、今日では認容しがたい薄弱な生物学的根拠にもとづいて社会現象を一元的に当時の進化論で裁断しようとするスペンサーの人種差別的臆測を無批判に取り込み、そのことによって生じた心理的葛藤を処理しようとして、自己の私的事情に関連した細かい情報を過剰に入れ込んでいる。これは既報した彼の境界型パーソナリティ構造の然らしめるところであろうが、のちのち、「混血第2世代」であるハーンの子息たちを、成人後に心理的に苦しめる結果になった。一方、スペンサーの助言の書簡と明治政府の政策との関連について、ハーンはかなり当を得た推理を施している。このあたりの消息はまた、没後のスペンサーの故国での急速な権威失墜の裏のからくりを多少窺わせるようでもあり、アメリカ時代の 'sensational reporter' ハーンの片鱗を垣間見せるジャーナリスティックな敏感さの名残と見ることもできよう。

参考文献

- 1) 遠藤みどり：Lafcadio Hearnの病蹟。
島根医科大学紀要20：17－21，1997
- 2) 遠藤みどり：アメリカ時代のLafcadio Hearnにおけるメンタルヘルス上の援助的枠組。
島根医科大学紀要21：1－6，1998
- 3) 遠藤みどり：Lafcadio Hearnに認められた異常心理と自己治療。百年後の日本からの視点。
精神医学41：283－292，1999
- 4) 遠藤みどり：ラフカディオ・ハーンの「業」と「耳無し芳一の話」。
日本病跡学雑誌59：103－106，2000
- 5) 小泉 凡：民俗学者・小泉八雲。恒文社、1995
- 6) Hearn, L.: Japan: an Attempt at Interpretation. Macmillan, New York, 1904
- 7) 平川祐弘編：世界の中のラフカディオ・ハーン。河出書房新社、1994
- 8) Spencer, H.: First Principles. (澤田謙訳：第一原理。世界大思想全集28巻、春秋社、1927)

ABSTRACT

Lafcadio Hearn's 'Appendix' of 'Japan : an Attempt at Interpretation'

Midori Endo

Keywords : Herbert Spencer, foreign policy of Meiji Government,
projective identification

'Japan : an Attempt at Interpretation' is perhaps the most popular work of Lafcadio Hearn in occidental readers. However, in Japan, this work has been far from popular nowadays, mainly because of the fact that its copyright was not given to his family immediately after his death, and Japanese translation after 2nd World War was published omitting his '*Appendix*' at its end. Accessibility to the information contained in this part has thus been very limited for lay Japanese readers until recently.

The *Appendix* is translated into Japanese in this present manuscript. Hearn had detected influence of Herbert Spencer on the foreign policy of the Meiji Government. It revealed Hearn's projective identification with Spencer including the latter's racism, which invoked conflict within Hearn and later tormented his children psychologically.